

JAL 争議の早期解決めざし決意新た／12.8 総決起集会

たたかう労働者による たたかう争議の支援は たたかう労働者の矜持



JAL 争議は終わっていない――。

CCUと乗員組合の争議は終結したが、終結に異議を唱え闘争を継続するJAL争議団の仲間たちを支えようと、12月8日文京区民センターで「JAL争議の早期全面解決をめざす12.8総決起集会」が開かれた。集会にはYouTube配信による視聴者も含め、500人余が参加。この集会は神奈川、東京中部、東京西部、東京北部などの支援団体が今年2月の集会に続いて実行委員会を作り開催したもの。



うたごえを披露する仲間たち

2労組が終結して、都労委闘争など新しいステージに入った。JHU（JAL被解雇者労働組合）の仲間たちを励まし、早期解決のため全力を挙げよう」と訴えた。

主催者あいさつのあと、争議の現状についてJHUの山崎秀樹書記長が報告を行い、国会議員からのメッセージが紹介されたあと、東京地評・井澤智事務局長と東京総行動実行委員会の大森進さんから連帯のあいさつが行われた。つづいて弁護団の紹介が

集会はこの1年余の活動をまとめたDVDの上映から始まり、争議団のみなさんによるうたごえが披露された。「あの空へ帰ろう」という澄んだ声が会場いっぱいに広がった。

集会は争議団の山田純江さんの司会ですすめられ、冒頭、主催者を代表して神奈川連絡会の宮垣忠さんが開会のあいさつに立った。宮垣さんは「JAL争議は、



弁護団紹介

行われ、指宿昭一弁護士、上条貞夫弁護士、岡田尚弁護士、加藤桂子弁護士が紹介され、発言があった。指宿弁護士は、新たな団体交渉の相手として国土交通省が入った経過などを紹介しながら「国交省はJALの経営に関して、解雇当時大きな影響力をもっていた。「関係ない」と主張しているが、通用しない。団交開催要求にきちんと応えるべきだ」と強調した。

弁護団紹介の後、JAL争議の解決を求めて声明などを出してきた呼びかけ人14人を代表して、専修大学の兵頭淳史教授が、声明文の紹介と経過などについて報告。この呼びかけに100人を超える研究者の賛同が集まったことにも触れた。



このあと、各地から参加した代表の連帯あいさつに移った。「JAL闘争を支える京都の会」「JAL争議を支援する岡山の会」「北九州争議団共闘」「JAL闘争を支援する四国共闘会議」「11.22北部決起集会実行委員会」から発言があり、工夫を凝らした幅広い活動が紹介された。

つづいて争議団の決意表明となり客乗争議団から鈴木圭子団長が、乗員原告団から近村一也団長がそれぞれ決意を述べ、JHUの山口宏弥委員長があいさつし締めくくった。集会は最後に、実行委員会の小林秀治・千代田区労協事務局長が、閉会のあいさつと当面の行動を提起し「団結がんばろう」を三唱して終わった。

集会は最後に、実行委員会の小林秀治・千代田区労協事務局長が、閉会のあいさつと当面の行動を提起し「団結がんばろう」を三唱して終わった。

会場には開催時間前から、仲間たちがぞくぞくと集まり始め、それは瞬く間に膨れ上がり、準備した椅子が足りなくなり追加を余儀なくされる場面も生まれた。結局椅子は不足し、立ったまま集会に参加する人も出るという盛況となった。



◇

会場には開催時間前から、仲間たちがぞくぞくと集まり始め、それは瞬く間に膨れ上がり、準備した椅子が足りなくなり追加を余儀なくされる場面も生まれた。結局椅子は不足し、立ったまま集会に参加する人も出るという盛況となった。

JAL争議を支援するために集まってきた仲間たちを見ながら、改めて争議支援の意味を噛みしめた。「解雇されたり、差別されたりしている人たちは企業による『合理化』の頂点にいる人たち。その仲間を支援することは、同じことを繰り返させない闘いでもあり、実は自分を守る闘いでもある」というのが私の持論だ。「情けは人のためならず」という言葉があるがそれぞれのものだ。

2労組の争議終結とともにJAL争議支援共闘会議は解散した。これはやむを得ない措置であろう。しかし、闘争を支える人たちの気持ちには変わりはない。この争議は絶対に勝たせたい、という働くものの連帯感「矜持」となって花開くことだろう。現にこの集会に寄せられた賛同団体、個人は匿名も含めて（集会後の確認を入れて）116団体・314人となりカンパは100万円を超えた。引き続いて、支援に全力をあげよう。

（報告＝副議長・水久保文明）

*千代田区労協通信バックナンバー／http://www.chyda-kr.org/kuroukyou_news.htm

※皆さんからの投稿、感想・ご意見などお待ちしております。